

# 『新生』から『夜明け前』へ (1)

De “Shinsei” à “Yoakemahe”

— sur les oeuvres de SHIMAZAKI Touson —

佐々木 涇  
SASAKI Thoru

## K氏に献じる

### はじめに

島崎藤村が1918年(大正7年)5月1日より朝日新聞に連載開始した『新生』(1919年10月23日完結)は世に衝撃的であった。むろん、その理由は内容のためで、藤村自らが姪との性的関係を告白したからである。それまで、詩人として世に知られ、『破戒』を著わした後、自然主義作家として田山花袋と共に先頭を切り、パリ滞在中に第一次大戦下のフランスの様子を新聞に載せる程の有名人であった。にも関わらず、自らの恥あるいは罪を告白する。ひとつ間違えば、スキャンダルとなり、有名人としてことを問われ、致命傷になり得る性質のものである。当時、物書きである作家がアウト・ロー的な立場に置かれた存在であったがために許されたのであるかも知れぬ。とは言え、世間が容易に容認し得ぬものであったに違いない。ましてやこれまで藤村自身は自伝的作品『家』の中でも、近親者達をモデルにして彼等の不始末を描いてさえいる。こうした中で、性にまつわることが何を意味しているか熟知しているはずである。小説家である藤村は自らの肉親達を冷静に見て、人間の一面を語り続け、今後は自らを描き出すのである。一人の人間として、果たして懺悔の意味で著わしたのであろうか。むしろ積極的な意味でここに見出していきたい。

### 1-1

『新生』が朝日新聞紙上に連載が開始されたのは、大正7年5月1日からで、フランスから帰国して二年後である。書き出しは主人公の岸本宛に書かれた友人の手紙で始まる。序の章として五回

の連載で完結されるのであるが、この手紙の内容と手紙から連想した思いが書かれている。

手紙の主は「これ(倦怠と懶惰の生活)が生(せい)の充実といふ現代の金口(きんぐち)に何等の信仰をも持たぬ人間の必定墜ちて行く羽目であらう。それならそれを悔むかといふに、僕にはそれすら出来ない。何故かといふに僕の肉体には本能的には生の衝動が極めて微弱になつて了つたからである。永遠に墜ちて行くのは無為の陥穽である」(註1)と告白する。これをきっかけに岸本は自らの生活の七年間を思い出す。

「その間、不思議なくらゐ親しいものの死が続いた。彼の長女の死。次女の死。三女の死。妻の死。つゞいて愛する甥の死。彼のたましひは揺られ通しに揺られた。」(註2)

さらに学校時代からの友人の死を知り、会葬の時に交わされた友人達との会話を思い出す。人生に対する思いを強調しながら。

「『皆一緒に学校を出た時分——あの頃は、何か面白さうなことが先の方に吾齊を待つて居るやうな気がした。斯うして居るのが、是が君、人生かねえ。』

言出すつもりもなく岸本はそれを二人の学友の前に言出した。

『左様サ、是が人生だ。』と菅は冷静な調子で言った。『僕は左様思ふと変な気のすることがある。』

『もうすこし奈様かいふことは無いものかね。』と岸本が言ふと、足立はそれを引き取つて、

「そんなに面白いことが有ると思ふのが、間違ひだよ。」

足立の部屋に菅と集まって見て、岸本はそこにも不思議な沈黙が古い馴染の三人を支配して居ることを感じたのであった。それほど隔ての無い仲間同志にあつても、それほど喋舌つたり笑つたりしても、互いに心が黙っていた。

「どうしても斯の仮ぢや、僕には死に切れない。」

岸本はそれを言はずに居られなかつた。(註3)

この序の章は次のように締めくくられる。

「岸本の四十二といふ歳も間近に迫つて来て居た。前途の不安は、世に男の大厄といふやうな言葉にさへ耳を傾けさせた。彼は中野の友人に自分を比べて、斯様な風に言つて見たこともある。友人のは生々とした寛いだ沈黙で、自分のは死んだ沈黙である。その死んだ沈黙で、彼は自分の身に襲ひ迫つて来るやうな強い風を待受けた。」(註4)

ここには岸本の沈んだ気分、彼自身を襲っている憂鬱さ、倦怠、そしてすでに四十歳を迎えた自らの歩みを思うが故に生じた暗い雰囲気が漂っている。連載が開始された時点では、むろん読者にはその由縁は不明であるが、姪との性的関係が、ここに陰を落としていることは否めない。「待受けた」とする以上、藤村自身が告白する決意は明らかだ。

だが、注目しておきたいのは手紙の主である友人が創作活動をせずに、「僕の生涯の絃の上には倦怠と懶惰が灰色の手を置いて居るのである」(註5)とするのを引き合いにしている点である。この友人は「芸術的生活と宗教的生活との融合を試みようとして居る」(註6)のであって、言わば、現実生活に追われてはいない。まして「相応な資産と儉約な習慣とを遺して置いて行つた父親があつて、この手紙にもよくあらはれて居る静寂な沈黙を味ひ得るほどの余裕といふものが与へられて居た」(註7)のである。俗な世界に振り回されることなく、知の世界にあつて、抽象的な次元に身を起き、人生を見ているのである。岸本はこれを「生々とした寛いだ沈黙」が故に生じたとする。

そして岸本も同じように倦怠に襲われている。

「會て彼の精神を高めたやうな幾多の美しい生活を送つた人達のこと、皆空虚のやうに成つてしまつた。彼はほとんど生活の興味をすら失ひかけた。日がな一日佻しい単調な物音が自分の部屋の障子に響いて来たり、果てしてもないやうな寂寞に閉される思ひをしたりして、しばらくもう人も訪ねず、冷たい壁を見つめたまま坐つたきりの人のやうに成つてしまつた。これはそもそも過度な労作の結果か、半生を通してめぐりにめぐつた原因の無い憂鬱の結果か、それとも母親のない幼い子供等を控へて三年近くの苦難と戦つた結果か、いずれとも彼には言ふことが出来なかつた。」(註8)

倦怠に襲われた理由として三点が挙げられている。いずれも現実生活の中で生じたがものであるが、とりわけ「原因の無い憂鬱」に強い興味を覚える。本論ではこの点にいずれは焦点を絞っていきたいと考えている。ともあれ、岸本は友人と比較して自らは「死んだ沈黙」としている。このような状況にあつて、おそらくは姪との関係が生じたのであろう。作者島崎藤村は序の章で岸本と友人のふたつの倦怠を提示し、比較するのは「死んだ沈黙」こそが彼にとって必要であつたとするのであろう。自らを新たに生かすめるために。

『新生』が連載されて、一ヶ月近く過ぎると反響が開始された。藤村はそのことさえも『新生』に書く。

「岸本の書き溜めて置いた懺悔の稿はポツポツ世間へ発表されて行つた。岸本と節子との最初の関係は早や多くの人の知るところと成つた。かねて自分の身に集まる嘲笑と非難とは岸本の期していたことで、それがまた彼の受くべき当然の応報であつた。」(註9)

姪の父である作者の兄や近親者達に強い衝撃を与えたことは言うまでもない。兄からは義絶を言い渡されさえもする。しかし、この小説は書き続けられる。関心を抱いているのは近親者達だけではない。文壇にある人達も同様である。彼等の反

応を見よう。

先ず読売新聞（大正八年二月二日）に掲載された記事であるが、中村星湖が書いている。第一部が終り、単行本として出版されたばかりで第二部は未だ発表されてはいない時点である。（註10）

中村は、作者が「恐らく生皮を剥ぐやうな苦しみを今経験しつゝある」と思いを寄せ、真剣に受けとめる。そして作者を、またこの小説を書いたことを理解しようと試みている。

「わたしの友人達の一人は、會て、『新生』がまだ単行にならない以前に、岸本氏の生活態度に対して、即ち普通の人間として殆んど唾棄すべき肉親相辱の罪過及びその世間への発覚を恐れて逃亡した卑怯な態度に対して激しい批評の苔を加えてゐた。そのころは、もし岸本氏に罪の自覚自責が強ければ強いだけ逃げ出したりするわけのものではないといふにあるらしかつた。またわたしの或友人達は、岸本氏のあゝした行為、あゝした心理を諒解することは出来る、けれども作者のあの程度の曖昧な描出を遺憾とすると云つた。恐らく前者は『新生』の主要人物に対する倫理的批判の代表的なものであり、後者は同じ作者に対する技術的非難の代表的なものであらう。」（註11）

中村星湖はこのように当時の代表的な批評を紹介している。どんな批評や非難があるにせよ、世に衝撃的であったことは事実である。大正九年一月号の「婦人公論」は「島崎藤村氏の懺悔として観た『新生』合評」と題して正宗白鳥、小川未明、徳田秋声ら28名の批評（依頼による回答形式）を掲載している。（註12）いずれも厳しい意見に基づく批評はなく、「良くぞ書いた」という主旨のものがあり、また読んでいないから批評はしないというものもある。中には今後どうするかという指摘もあり、読んだ人々に何らかの影響を与えたことは疑えない。

そして芥川龍之介である。

「最後に自然主義の巨擘たる島崎藤村氏は長編『新生』の一作に、全一年間の労作を傾注したと云つても差支へない。また『新生』は藤村氏

の如き老大家が、空前の努力を試むべき好個の材料を捉へたものである。が叔姪の恋愛と言ふ如き大問題でありながら、『新生』の主人公の自己批判は余りに容易なる感じがある。従つてこれを肯定しようとする主人公の心もちも余りに虫が良すぎる観なきを得ない。忌弾なく云へばこの観照上の甘さが、今日の文壇をして藤村氏を遠からしむ所以ではあるまいか。」（註13）

当時公に発表されたものである。倫理的側面からのみ受け留めている。ここに芥川固有のとらえ方があるであろうが、より一層芥川の考えを明白にしたのが『或る阿呆の一生』の中においてである。「四十六号」と題した文章中にある。

「彼の姉の夫の自殺は俄に彼を打ちのめした。彼は今度は姉の一家の面倒も見なければならなかつた。彼の将来は少なくとも彼には日の暮れのやうに薄暗かつた。彼は彼の精神的破産に冷笑に近いものを感じながら、（彼の悪徳や弱点は一つ残らず彼にはわかつてゐた。）不相変いろいろの本を読みつづけた。しかし、ルツソオの懺悔録さへ英雄的な嘘に充ち満ちてゐた。殊に『新生』に至つては、——彼は『新生』の主人公ほど老憎な偽善者に会つたことはなかつた。が、フランソア・ヴィオンだけは彼の心にしみ透つた。彼は何篇かの詩の中に「美しい牡」を発見した。

絞罪を待つてゐるヴィオンの姿は彼の夢の中にも現われたりした。彼は何度もヴィオンのやうに人生のどん底に落ちようとした。が、彼の境遇や肉体的エネルギーはかういふことを許す訳はなかつた。彼はだんだん衰へて行つた。丁度昔スウィフトの見た、木末から枯れて来る立ち木のやうに。……………」（註14）

『或る阿呆の一生』は芥川龍之介が36歳で自殺した後に友人である久米正雄の手によって、遺言どおりに発表されたものである。ここにおいても同じく倫理的な捉え方が強く、とりわけ芥川自身が危機的な状況にあつたが故に、このような表現が強くなったのであろう。少なくとも、『新生』を冷静に捉えているとは言い難い。専ら自らの生

を肯定し、真実なる心情を吐露する作品を求めていたのではあるまいか。『或る阿呆の一生』が晩年の作品であることに注目すれば、全体が陰鬱な雰囲気漂わせているのは、人生の様々な事象に対して、悲観的な側面から本質を見出そうとしていると言えよう。芥川が『地獄変』で示したように、芸術至上主義を否定しているから、藤村の『新生』は唾棄すべきものとなるかもしれぬ。芥川が「虫が良すぎる」とするのは、『新生』においてテーマの深め方が不足していることになるだろう。とは言え、ここに「生」に対する姿勢と、両者のそれに対する考え方の相違点がある。藤村が「私のやうなものでもどうにかして生きたい」とするように、たとえ甘えがあるにしても、生を肯定し、生に執着し、そして秘そかなる目的のために『新生』を著わしたのであろう。

#### 1-2-(1)

岸本の心の動きを中心に内容を辿っておきたい。同時に岸本の姪である節子の心もしくは行動も追うことにする。

序の章に引き続き、姪の節子が『私の様子は、もう叔父さんには最早よくお解かりでせう。』（註15）と切り出すまでは、人生という流れから幾分それた澁みの中に、岸本が描かれている。この澁みは四十歳になったばかりの岸本になんら自信を与えてはいない。むしろ情熱が失われている様子が描かれる。

「岸本は六年の間の仕事場であつた自分の書齋を眺め廻した。會ては彼の胸の血潮を湧き立たせるやうにした幾多の愛読書が、さながら欠びをする静物のやうに、一ぱいに塵埃の溜つた書棚の中に並んで居た。」（註16）

このような澁みの原因となるべきもののひとつとして妻のことが思い起こされる。妻と死別して三年が経過しているが、それ以前の妻園子との十二年間の生活が影を落としているのである。

「『父さん、私を信じて下さい・・・私を信じて下さい・・・』

左様言つて、園子が彼の腕に顔を埋めて泣い

た時の声は、まだ彼の耳の底にありありと残つて居た。

岸本はその妻の一言を聞くまでに十二年も掛つた。園子は豊かな家に生まれた娘のやうでもなく、困難にもよく耐へられ、働くことも好きで夫を幸福にするかざかズの好い性質を有つて居たが、しかし激しい嫉妬を夫に味はせるやうな極く不用意なものを一緒にもつて岸本の許へ嫁いで来た。自分はあまりに妻を見つめ過ぎた、と左様岸本が心づいた時は既に遅かつた。彼は十二年もかゝつて、漸く自分の妻とほんとうに心の顔を合せることが出来たやうに思つた。そしてその一言を聞いたと思つた頃は、園子はもう亡くなつてしまつた。」（註17）

このことは岸本に種々の縁談話が持ち上がつても、男と女の関係のため、ためらいをもたらす。

「岸本はもう準備なしに、二度目の縁談なぞを聞くことの出来ない人に成つてしまつた。独身は彼に取つて女人に対する一種の復讐を意味して居た。彼は愛することをすら恐れるやうに成つた。愛の経験はそれほど深く彼を傷つけた。」（註18）

それ故、彼は「妻が残して置いて行つた家庭をそのまま別の意味のものに変へようとした」のである。だがそれも思うようにならず、岸本自身の部屋の壁のように立ちはだかり、「早三年近くもその自分の部屋の壁を見つめてしまつたことに気がついた。そしてその三年の終の方に出来た自分の労作の多くがいづれも『退屈』の産物であることを想つて見た」りもする。（註19）

こうした状態の中で、岸本親子の細々した面倒を見るために一年程前から同居していた姪の節子は岸本の子供達から母親のように親われている。そして不吉な前兆とも思えるような出来事が起きる。隅田川に身ごもった女の溺死体が発見されたこと、仏壇を片付けていた節子の手が、原因不明の血で染まることである。

ここまでが導入部であるが、岸本の混沌とした気持、四十歳とは言え、まだ人生に何かがあるのではないかと期待する気持が描かれている。そし

て不吉な出来事をそこに交えて読む者を引きつけている。

この後に先に引用した節子の言葉で、節子が母親になり、岸本が父親になることを知る。澱みの中に渦が生じたのである。この性的関係は人生という大きな流れの中に踊り出て、その当事者達を共に生きよと励ますものとはなり得なかった。近親者であるがためである。およそ「生」を肯定し、人生を輝かsherめるようなものではない。まして非難されることはあっても、周囲から贅辞が与えられ、祝いを受ける対象とはならない。つまり澱みの中にいる岸本にとっては、生としての営みの原動力たらしとするものにはならない。書棚の情熱を掻きたてる愛読書を見ても、かつてのような若き心情をもちや持ち得なかった。岸本は「早老人の心を味は」い、「忌々しく思」（註20）うのみである。修道僧や兼好法師などのストイックに生きる人々を考えたりもする。そんなでありながらも節子に妻の残した衣類を与え、言わば妻の位置を与えるかのような行動を取る。

人生の流れの中で、岸本自らが澱みとする状態に陥ったのは何も節子との関係によるものではない。むしろ妻との緊張関係が失せたことが大きな理由と思われる。激しい緊張関係の中であって自らの存在感を保ち得たのである。妻が亡くなった後に生じた解放感に満たされた状態にあっては、生きることの支えとなるべきものが、たとえそれが意識されずとも、失われたのである。だが節子との関係は、むろん妻とのそれとはならない。いまや、澱みの中であってどこに引きこまれるか判らぬ渦に捲込まれたのである。右に左に揺れ動く岸本が描かれるのみで、その心の有り様がどのように節子に伝わったか、そして節子の心情も、この導入部までは描かれていない。

### 1-2-2)

節子の告白を受けて、ことの処し方に岸本は窮する。子供が誕生してしまうからだ。

「嵐は到頭やつてきた。彼自身の部屋をトラピストの修道院に喩へ、彼自身を修道院の僧侶に喩へた岸本のところへ。」（註21）

様々な思いが岸本の内部に湧いてくる。その沈み込んだ状態ははためにも分かってしまう。「『旦那さんは今朝は奈何かなすつたんですか。御飯も召上がらず』」（註22）と姿やに不審に思われる。だが岸本の思いは複雑だ。親戚縁者はむろんのこと、友人や岸本を慕う人々が知ったらどうなるか。さらには新聞記者の知るところとなったらどうなるか。「眼に見えない石が自分の方へ飛んで来る時の痛さ以上に、岸本は見物の喝采を想像して見て悲しく思」（註23）い、沈んでしまう。発覚をただひたすら恐れるのみである。

時には友人から料亭に誘われても、芸者の謡う唄は心に染みるばかりであって、心底からの寛ぎはない。

「昼と夜とは長い瞬間のやりに思はれるやりに成つて行つた。そして岸本の神経は姪に負はせ又自分でも負つた深傷に向つて注ぎ集るやりに成つて行つた。」（註24）

だが常に節子と顔を突き合わせて生活をしなければならぬ。

「七日ばかりも岸本はろくろく眠らなかつた。独りで心配した。昼の食事の時だけは彼は家のものと一緒でなしに、独りで膳に対ふことが多かつたが、左様いふ時には極りで節子が膳の側へ来て座つた。彼女はめつたに叔父の給仕の役を姿やに任せなかつた。それを自分でした。そして俯向き勝ちに帯の間へ手を差し入れ、叔父と眼を見合せることを避けよう避けようとして居るやうな場合でも、何時でも彼女の膝は叔父の方へ向いてゐた。晩かれ早かれ破裂を見ないでは止まないやうな前途の不安が二人を支配した。岸本は膳を前にして、黙つて節子と対ひ合ふことが多かつた。」（註25）

節子の体をいたわりながらも、岸本は加害者のような気持を持ち続ける。

「親類の女の客があつた後では、岸本は節子と顔を見合せることを余計に苦しく思つた。それは唯の男と女とが見合せる顔では無くて、叔父

と姪との見合せる顔であつた。岸本は節子の顔にあらはれる暗い影をありありと読むことが出来た。その暗い影は、「貴様は実に怪しからん男だ」といふ兄の義雄の怒つた声を心の底の方で聞くにも勝つて、もつともつと強い力で岸本の心に迫つた。快活な姉の輝子とも違ひ、平素から節子は口数も少い方の娘であるが、その節子の黙し勝ちに憂ひ沈んだ様子は彼女の無言の恐怖と悲哀とを、どうかすると彼女の叔父に対する強い憎しみをさへ語つた。

「叔父さん、私は如何して下さいます——」  
この声を岸本は姪の顔にあらはれる暗い影から読んだ。彼は何よりも先づ節子の鞭を受けた。一番多く彼女の苦んで居る様子から責められた。  
(註26)

岸本が発覚を恐れているのは自らの行動を性的な衝動のためと捉えているがためであり、常に自らのことのみを考え続けているためである。かつて見た芝居を思い浮べ、自分に引きつけて考えもする。

「近代劇の年老いた主人公をふと胸に浮べた。その主人公の許へ洋琴を弾いて聞かせるだけの役目で雇はれて通つて来る若い娘を胸に浮べた。生気のある娘の指先から流れて来るメロディを聞かうが為には、劇の主人公は毎月金を払つたのだ。そして老年の悲哀と寂寞とを慰さめやうとしたのだ。岸本は劇の主人公に自分を比べて見た。時には静かな三味線の音でも聞くだけのことを心やりとして酒のある水辺の座敷へ呼んで見る若草のやうな人達や、それから若い時代の娘の心で自分の家に来て居るといふだけでも慰さめになる節子をあの劇中の娘に比べて見た。」(註27)

この気持は医者<sup>ドクター</sup>の診断がことを否定することさえも望む。あげくに隅田川の女の溺死体を思い出して、「『節ちゃんは彼様いふ人だから、ひよつとすると死ぬかも知れない』」(註28)とも思い込み、さらに沈み込んでしまう。そしてこの思いは自らの運命を呪う方へと導く。

「妻の園子を失つた後二度と同じやうな結婚生活を繰返すまいと思つて居た彼は、出来ることなら全く新規な生涯を始めたいと願つて居た彼は、独身そのものを異性に対する一種の復讐とまで考へて居た彼は、日頃煩はしく——しかも一人の小さな姪のために斯うした暗いところへ落ちて行く自分の運命を実に心外にも腹立たしくも思つた。」(註29)

その運命を甘受し、開き直つた考えも彼に訪れる。つまり罪を犯したことを謝罪し、法の鞭を受けようというものである。だが決意までには至らない。

この時、岸本は自らの若い頃のことを小説に書いていたのであるが、書きかけの原稿を読みながら青年時代を思い出す。

「止み難い精神の動揺から、一年ばかりも流浪を続けた揚句、彼の旅する道はその海岸の波打際へ行つて尽きてしまつた。その時の彼は一日食はず飲まずであつた。一銭の路用も有たなかつた。身には法衣に以て法衣でないやうなものを着て居た。それに、尻端折、脚絆、草鞋穿といふ異様な姿をして居た。頭は坊主に剃つて居た。その時の心の経験の記憶が復た實際に岸本の身に環つて来た。」(註30)

岸は追いつめられている。かつての若い時と同じように。「遠い島」か、「寺院」か。

「しかし、左様した遁路を見つけるには彼は余りに重荷を背負つて居た。余りに疲れて居た。余りに自己を羞ぢて居た。彼は四つ並んだ幻の墓の方へ否でも応でも一歩づゝ近づいて行くの外はなかつた。」(註31)

だが彼自身の死、自殺の思いではない。何故なら岸本の心の底には常に「どうかして生きたいと思ふ」(註32)気持があるからである。優柔不断ではなく、この気持はむしろ、生きることに自らを追い込んで行こうとするものである。「唯、心を決することのみが彼を待つて居た」(註33)のである。

一方、節子についてはどうか。節子に関する描写は少ない。岸本の心情が中心で、節子のそれは分かりにくい。だが、節子の心は岸本を慕う方向にあると言えよう。先に引用した節子の岸本を責める眼は岸本の主観による判断でしかない。次のような部分もある。

「叔父を恐れぬやうに成つてからの節子の瞳は、叔父に対する彼女の強い憎みを語つて居るばかりでも無かつた。どうかとするとその瞳は微笑んで居ることもあつた。そして彼女の顔にあらはれる暗い影と一緒に成つて動いて居た。『妙なものですな。』

節子は斯うした短い言葉で、彼女の内部に起つて来る激しい動揺を叔父に言つて見せやうとすることもあつた。しかし、岸本は不幸な姪の憎みからも、微笑からも、責められた。その憎みも微笑も彼を責めることに於いては殆ど変わりがなかつたのである。」(註34)

節子に心の変化らしきものがあつても、節子の心を思うことなく、岸本は常に自らに責めを負わせることで終つてしまう。

すでに岸本がフランスへ行くことを決意し、方々へ話したりした後のことである。とりあえず、岸本自身がどうするかを決定したがために、節子を見る眼に余裕が生じたのであろう。むしろ、節子を今後どうするか、兄に依頼するにしてもどう切り出すかを考えてはいる。しかし頭を悩ますのみで、具体的に行動はせず、フランスへ向う船中で認める手紙で告白するまで俊逸する。フランス行を決意したのは、料亭の酒の席での友人とのやりとりがきっかけになっている。その決意を、家に戻った岸本は、「好いことがある。まあ明日話して聞かせる」(註35)と言う。自ら引き起こした過酷な運命から逃げ出す自分のみの行動を「好いこと」とする勝手さ。

これまで見てきたように、岸本は姪との関係を、そしてその後始末を、常に自らを中心に据えて考えている。自己中心的で自らの利のみを考えていると言つて言い過ぎではない。おそらく読者は、なんて自分勝手だろう、と言うに違いない。先に述べたように岸本の視点からのみ節子を判断する

のは注意しなければならない。岸本の旅立ちの前後の一場面に次のような部分がある。

「十二時打ち、一時打つても、まだ部屋の内はずつかり片付かなかつた。『お前達はもう休んでお呉れ。』と岸本は節子や姿やに言つた。

『姿や、お前は明日の朝早い人だ。俺の方は構はなくても可い。遠慮しないでお休み。』

『左様でございますか。』と姿やは受けて、

『ほんとに遠方へ被入つしやるといふものは、御支度ばかりでも容易ぢやござりません——旦那さん、それでは御先に御免蒙ります。』

『節ちゃん、お前もお休み。』

と岸本が言ふと、節子の眼は涙でかぶやいて来た。羅馬文字で岸本の名を記しつけた鞆を見るにつけても、悲しい叔父の決心を思ひやるやうな女らしい表情が彼女の涙ぐんだ眼に読まれた。『叔父さん、お休み。』それを言ひながら、彼女は激しい<sup>すすりなき</sup>啜泣と共に叔父の別離のくちびるを受けた。」(註36)

節子の岸本を慕う涙と見た方が自然である。岸本を恨む気持があつては涙は出ないだろうし、くちびるを受けることはあるまい。

岸本をこんなにまで、自己中心的に描いた作家島崎藤村の真意はどこにあるか。自らの現実の問題として自己中心的であった自分自身を曝け出すということで、謝罪もしくは懺悔の意味もあるであろう。だが、四十歳に達した人間を冷静に見直すことで、人間の本質であるところの、程度の差はあれ、己の利を常に考えている醜さを描きかたつたのではあるまいか。岸本のとつた行動を衝動的な性行動としてのみ捉え、人間につきものの心、とりわけ節子の岸本に対する心情が克明に描かれてはいない。むしろ、岸本の動揺ぶりは見るも無残であるが、現実の即物的な世界に埋れて、生活し、事に振り回されている人間が描かれているのである。

### 1-2-(3)

東京を離れた岸本は、神戸で二週間余もフランス行の船を待つ。それというのも子供達と節子を節子の両親に、つまり兄夫婦に預けるのであるが、





生を過り、そのために自分も會て経験したことの無いやうな深刻な思を経験したと書いた。節子は罪の無いものであると書いた。彼女を許して欲しいと書いた。彼女を救って欲しいと書いた。……………この手紙を受取られた時の大兄の驚きと悲しみとは想像するにも余りあることであると書いた。とても自分は大兄に合せ得る顔を有つものではないと書いた。書くべき言葉を有つものでもないと書いた。唯、節子のために斯の無礼な手紙を残して行くと書いた。自分は遠い異郷に去つて、激しい自分の運命を哭したいと思ふと書いた。義雄大兄、捨吉拜と書いた。」(註42)

日本を離れる岸本の気持はどんなであったろうか。かつての先人達が行ったような西欧文化吸収のための旅ではない。自らを追いつめ、身を隠すための旅である。自らを葬ろうとする旅である。

### 1-3-(1)

新聞連載は百三十回で第一部が終了した。このうち五十二回目からはフランス滞在中のことが記されている。この間、常に岸本は旅人であることが頭から離れない。むろん、節子に対する罪意識も描写されている。だが、それもわずかな変化を見せている。この期間の岸本の心の動きを追っていく。

旅人であることは、先ず岸本に何をもたらしたか。初めて見るパリのマロニエとプラタナスの並木は森のようであったし、ルクサンブル公園を好んで散歩をした。岸本にとっては至る所が「旅人らしい散歩の場所」(註43)であった。とは言え、パリでの生活はそれまでの四十年間の日本での生活習慣の大部分を棄てることにもなった。街の中を歩いているぶんには物珍しさが手伝って意識されなかったであろうが、生活の場としての自らの部屋に戻った時に違和感はかなりのものであったに違いない。

「彼は全く新規な、全く異なつたものの中へ飛込んで来た。それには長い年月の間、身に浸みついている国の方の習慣からして矯て掛らねば成らなかつた。彼のやうに静座する癖のついた

ものには、朝から晩まで椅子に腰掛けて暮すといふことすら一難儀であつた。日がな一日彼は真実の休息を知らなかつた。立ちつゞけに立つて居るやうな気がした。日本の畳の上で思ふさま斯の身体を横にして見たら。この考へは、どうかすると子供のやうに泣きたく成るやうな心をさへ彼に起させた。」(註44)

そればかりではない。節子の出産のことを知らせる兄や節子自身の手紙、そして偶然にも往來を挟んでの産院があることなどが、岸本に常に罪意識を覚えさせる。ともすれば自らの内面へと眼を向けさせていくのが常であるとは言え、一方に旅人であるが故に別な体験をも味わう。

「あの島国の方に引込んで海の魚が塩水の中でも泳いで居れば可いやうな無意識な気楽さをもつて東京の町を歩いて居た時に比べると、稀に外国の方から来た毛色の違つた旅人を見て『異人が通る』と思つた彼自身の位置は丁度顛倒してしまつた。否でも応でも彼は自分の髪の毛色の違ひ、皮膚の色の違ひ、顔の輪郭の違ひ、眸の色の違ひを意識しない訳には行かなかつた。逢ふ人毎にジロジロ彼の顔を見た。斯うした不断の被觀察者の位置に立たせらるゝことは、外出する時の彼の心を一刻も休ませなかつた。そしてまた斯様な骨折が實際何の役に立つのだらうとさへ思はせた。」(註45)

異人としてフランス人から見られること、そこには罪意識を通して内側から自らを見るのではなく、異人種として自らを意識せざるを得ない状態にあつた。この自分を客観的に捉えることは、言わば、旅人の特性である。確かに旅人は岸本のやうにホームシックにもなる。だが岸本は「それを考へた時は実に忌々しかつた」(註46)とする。旅のもたらす苦痛である。とりわけ節子や残して来た子供達から送られた手紙などは、一層懐郷の念をもたらす。しかし、四十歳を過ぎているとは言え、岸本は慣れを手に入れ、忘れさえる。

「『人はいかなる境涯にも慣れるもので、それがまた吾侪に与へられたる自然の恵である』と

言った人もあつたとやら。ある人はまた、「慣れるといふことほど恐ろしいものは無い」とも言つたとやら。岸本はその二つの言葉の意味に籠る両様の気質と真実とを味ひ知つた。所詮彼とても慣れずには居られなかつた。そして高い建築物も左程気に成らず、往来も平気で歩かれ、全く日本風の畳といふものも無い部屋に一日腰掛けて暮せる頃は、自分の髪の毛色の違ひ、自分の皮膚の色の違ひを忘れる時すらあるやうに成つた。」(註47)

そればかりではなく、さらに超越したかのごとき状態にもなった。

「不思議にも、外界の事物に対して是程彼が無頓着に成つたと同時に、外界の事物もまた彼に対して無頓着に成つた。彼は自分の部屋の窓の下を往来する人達と全く無関係に生きて行く異邦の旅人としての自分の身をその客舎に見つけた。あたかも獄裡に繋がるゝ囚人が全く娑婆といふものと縁故の無いと同じやうに。」(註48)

少なくとも、日本に居る時のように、自らの罪を意識しながら他人の眼を気にする必要のない状態であると言えよう。むしろ好ましい状態である。

このような岸本の状態に、作者島崎藤村はフランス人の知り合いを登場させる。日本に関心を持った老婦人は影響を与えてしまった姪が日本に行つてしまい、日本人と結婚してしまつたことを悔いている。むろん、その老婦人の姿は、事情は違えても、岸本の姿に重なる。姪達の人生に大きな影響を与えてしまつたという点では同一である。このような老婦人を登場させることは、岸本が自責の念に捉われている姿とその苦悩を補強することになる。この老婦人との出会いは、罪意識にのみ捉われていた岸本に新たな感慨をもたらした。

「老婦人の手紙の中には可成過酷きびしいことが書いてあつた。しかし知らない土地の人でそれだけ真実のことを岸本のところへ書いてよこして呉れる人すら、めつたに無かつた。彼は異邦人としての自分の旅がそれほど土地の人達の生活から縁遠いものであることを知つて来た。諸国

から巴里に集つて来る多くの旅人を相手に生計を営んで居るやうな人達の間で醸される空気が非常に慇懃いんきんなもので陰しく冷たいものを包んで居るやうな空気が、慣れては知らずに居るほど職業的に成つてしまつたやうな空気が、実に濃く彼の身を圍繞とりまいて居ることを知つて来た。仏蘭西人の家庭を見て来た眼で自分の下宿を見る度に、何時でも彼は嘆息してしまつた。」(註49)

パリで知り合った画家で、やはり日本で女性関係に苦しんだ友人の岡は岸本に言う。

「『兎に角旅に来ると、自分といふものを省るやうに成るね。』」(註50)

「自分を省る」こと、まさしく岸本はその作業を始めたのである。かつてそれに着手していたのであるが、再度それを見直すことにしたのである。

「国の方に残して置いて来た子供のことも心に掛つて、遠く離れて居る泉太や繁を養ふためにも、岸本は果したいと思ふ仕事を客舎で急がうとした。七月も下旬に入つた頃であつた。窓の外へは時々雷雨が来て、どうかすると日中に灯火を欲しいほどに急に部屋の内を暗くすることも有つた。岸本が稿を継がうとしたのは東京浅草の以前の書齋で書きかけた自伝の一部ともいふべきものであつた。部屋に居て机に対して見ると、その稿を起した頃の心持が、まだ斯の旅を思立たない前に恐ろしい嵐の身に迫つて来た頃の心持が、あの浅草の二階でこれが自分の筆の執り納めであるかも知れないと思つた頃の心持が、岸本の胸の中を往来した。巴里の客舎にあつて、もう一度その稿を継ぐことが出来ると考へるさへ不思議のやうであつた。」(註51)

「その稿」とは『新生』の25章の部分で、岸本が読み返したものである。彼がどのようにしたら良いかと節子のことで混乱していた時点である。

### 1-3-(2)

島崎藤村が小説『桜の実』の一部分を発表したのは大正二年で渡仏前であつた。(註52)だが渡

仏準備のため書き継ぐことができず、読者に向けて「『桜の実』の読者に」と題して、弁明し、パリからの寄稿を約した。この約束も果たされず、大正三年五月号の「文章世界」に『桜の実の熟する時』と改題されて、連載が開始された。出版元の博文館編集部長宛の三月六日付けの手紙には次のように記されている。

「・・・もう是からはずんずん書いて今までのやうな御迷惑を掛けずに済むと思ふやうになりました。原稿は、以前二回だけ「文章世界」に出しましたが、全部初めから新しく書いて送ります。題は『桜の実の熟する時』と改めました。すこし長い題ですがその方が内容に適すると思ひますから。」（註53）

『桜の実』では主人公の種夫はいきなり登場せずに、種夫が育てられた岡田家の者達が長野から戻る種夫のことを話題にしている。ついで戻って来た種夫の沈んでいる様子、「亜米利加風のカレッジ」の寄宿舎に住むまでの経緯と、九月の新学期になっても沈んだ様子が描かれている。（註54）

『桜の実の熟する時』は、夏休み前に主人公捨吉が人力車に乗った女性を見かけ、出会いに期待する場面から始まる。

「・・・過ぐる一年あまりの間、成るべく捨吉の方から遠ざかるやうにし、逢はないことを望んで居た人だ。その人が俤で近づいた。避けよう避けようとして居たある瞬間が思ひがけなくも遣つて来たかのやうに。」（註55）

改題したこの作品で、言わば藤村自身の姪、こま子との関係を整理するためというより、自らの若い頃の自分を見つめることで捉え直そうとしたのである。『新生』第一部の25章に引用された部分はこの改題された2章の一部分である。この部分がいつ書かれたかは不明である。しかし、『桜の実』は主人公の学校の夏休みが終ろうとしている場面から始まっていることを見れば、おそらく『新生』に引用された「暑中休暇が来て見ると・・・」で始まる部分はパリで書かれたものと思われる。

なぜ藤村は『新生』で岸本にこの部分を読ませたのか。この25章の最後の部分に次のようにある。

「読んで行くうちに、年若な自分がそこへあらはれた。何かしら胸を騒がせることがあると、直ぐ頬が熱くなつて来るやうな、まだ無垢で初心な自分がそこへあらはれた。何か遠い先の方に自分等を待受けて居て呉れるものがあるやうな、心持でもつて歩き出したばかりの頃の自分がそこへあらはれた。岸本は自分の少年の姿を自分で見る思ひをした。」（註56）

岸本が姪節子のことで苦悶している時である。「無垢で初心な」若き岸本に直面することは、絶望の極みにあって、未来に展望を見出しえない自らを確認するのみである。だが今は違う。先に述べたようにパリにあって、岸本は自らを省みる作業を開始した。『桜の実の熟する時』を書き続けたのである。この作品はパリ滞在中に5章まで書かれ、6章以降は、帰国後大正七年十一月号から連載が開始され、翌年六月号で完結される。そして先に触れたように、『新生』は同年五月一日から連載が開始となる。

このパリ滞在中に書かれた五章までの部分を簡単に概略しておく。捨吉は、書きだしの部分での女性、繁子にもう逢わないと決意したがために沈んだ状態になっている。幼い頃から預かり育てた田辺の家の者達が、以前の捨吉と比較し、変りようを気にもするが、洋行も辞さぬ程の期待を彼に掛けていた。勉強好きの捨吉は夏休み中の夏期学校でキリスト教への造詣を深める。だが一方でバイロンの詩に感動し、バアンズやゲーテにも魅かれ、大きな世界のあることを知る。「もつともつと胸一ぱいに成るやうなものを欲しい」（註57）とする若い捨吉が描かれ、繁子を教会や講座の中で捜す捨吉も描かれている。そして嘆息する。

「神は何故に斯く不思議な世界を造つたらう。何故にあるものを美しくし、あるものを殊更醜くしたらう。何故に雀の傍に鷹を置き、羊の側に狼を置き、蛙の側にいたちを置いたらう。何故に平和な神の教会にまで果しなき暗闘を付与し、富める長老と貧しい執事とを争はずだらう。

捨吉は斯く思ひ沈んだ。

姦淫する勿れ、処女を侵す勿れ、嫂を盗む勿れ、其他一切の不徳はエホバの神の誡むるところである。パイロンの一生は到底神の寡納するものとは思はれない。英吉利の詩人が以太利へ遊んだ時、ゴニスの町で年頃な娘をもつた家の母親はあの美貌で放縦な人と見せまいとして窓を閉めたといふではないか。それにしても、万物を悲観するやうなパイロンの詩が奈何して斯う自分の心を魅するだらう。あの魅力は何だらう。仮令彼の操行は牧師達の顔を洗めるほど汚れたものであるにもせよ、あの芸術が美しくないとは奈何して言へやう。」(註58)

若き捨吉は世の全てを善と悪として捉えるようにしてキリスト教に導かれている。その教えに導かれた精神の気高さを善とするのはそれで良い。だがその教えに反した者が生み出した芸術作品が観る者の心を奪うのは何故か。言うまでもなく、さまざまな苦悩や喜びなどに裏打ちされた心が素直に表現されているからである。何ら、神の教えによる戒めに捉われていないがために。人間の持つ憶悩や感情表現が生き生きと伝わって来るからである。ましてやこの時期の捨吉は肉体的な変化の生じている時である。

「憂鬱——一切のものの色採を変へて見せるやうな憂鬱が早くも少年の身にやつて来たのは、捨吉の寝巻の汚れる頃からであつた。何もかも一時に発達した。丁度彼が<sup>むし</sup>筆つて居る草の芽の地面を割つて出て来るやうに、彼の内部に萌したものは恐ろしい勢いで溢れて来た。髪は濃くなつた。頬は熟して来た。顔の何の部分と言はず癢い吹き出ものがして、膿み、腫れあがり、そこから血が流れて来た。制へがたく若々しい青春の潮は身体中を駆けめぐつた。彼は性来の臆病から、仮令自分で自分に知れる程度にとどめて置いたとは言へ、自然を蔑視<sup>はし</sup>み軽侮<sup>は</sup>らずには居られないやうな放肆<sup>はし</sup>な想像に一時身体を任せた。」(註59)

かつては西鶴の『一代女』を引き裂いて捨てたこともあり、大人の情事に関心はないと偽ったこ

ともある。そんな捨吉を変人としても、自らは「むしろある快感を覚え」(註60)さえしたのである。だが逆に沈んでしまった捨吉は、田辺の家族と同様に友人達にも変わったことを指摘される。

「思ひ屈したあまり、彼はどうかすると裸体で学校のグラウンドでも走り廻りたいやうな気を起して、自分で自分の狂じみた心に呆れたこともある。」(註61)

精神の気高さと獸的な肉欲の狭間にあって、若き捨吉は揺れ動いているのである。

パリ滞在中にこれが書かれたことは、むろん、こま子との関係がここに影響を落としていることは言うまでもない。自らの若い時を見詰めなおすことで、獸的な肉欲に振り回された思いを、つまり罪意識をどのように克服しようとしているかが推察されよう。ここで指摘したいのは、克服のためにキリスト教を援用しようと思われる節がある点である。アベラールとエロイズの愛情についてである。「新生」の中に次のような部分がある。

「岸本に取つては旅の心を引く一つの事蹟があつた。他でもない、それはアベラールとエロイズの事蹟だ。英学出の彼はあの名高い学問のある坊さんに就いて精しいことは知らなかつた。でも彼がアベラールの名に親しみ始めたのはずっと以前のことである。アベラールとエロイズの愛。何程青年時代の岸本はその奔放な情熱を若い心に想像して見たか知れない。あの学問のある尼さんのためには男も捨て僧職<sup>むね</sup>も擲つたといふアベラールの名は何程若かつた日の彼の話頭に上つたか知れない。」(註62)

友人の岡に墓参したことを告げる。

「『……散々僕等は探し廻つた揚句に、古い御堂の前へ行つて立ちました。それが君、アベラールとエロイズの墓サ。二人の寝像が御堂の内に置いてあつて、その横手のところには文字が掲げてありました。斯の人達は終生変わることはない精神的な愛情をかはしたなんて書いてありましたつけ。まあ比翼塚のやうなものです

ね。でも君、青苔の生えた墓石に二人の名前が彫りつけてでもあつて、それを訪ねて行くのなら比翼塚の感じもするが、どうして其様なものじゃない。男と女の寝像が堂々と枕を並べて居るから驚く。「流石にアムウルの国だ」なんて、高瀬君が言つて笑ひましたつけ。」(註63)

今やパリに居る藤村はこの「新生」の中に描かれている岸本と同様に、性的な結びつきによらない愛情に希望を見出そうともする。むろん、ここには若き日の自らの姿と重なっている。若き日のそれとは異なるのは、すでに罪を犯してしまっていることである。対象が肉親の姪であるが故に自責の念が強く、その反動として精神的な結びつきに対する強い願望が窺える。

第一次大戦を迎えて岸本はリモージュに疎開した。自らを振り返る作業は続き、落ち着きを覚える。

「何といふ心の狼狽を重ねたらう。何といふ一生の失敗だつたらう。斯の深い感銘は時と共にますますはつきりとして来ることは有つても、薄らいで行くやうなものでは無かつた。しかし一時のやうな激しい精神の動揺は次第に彼から離れて行つた。不幸な姪に対する心地のみが残るやうに成つて行つた。その時になつて彼は心静かに自分の行為を振り返つて見た。どうかして生きたいと思ふばかりに犯した罪を葬り隠さうと穏さうとした彼は、仮令いかなる苦難を負はうとも、一度姪に負はせた深傷や自分の生涯に留める汚点を奈何することも出来ないかのやうに思つて来た。彼は自分を責めれば責めるほど、涙ぐましいやうな気にさへ成つた。」(註64)

そして都会にない自然の風景は心を和ませる。

「岸本は木の靴なぞを穿いて通る人の足音を一方の抜道の方に聞き、野菜畠の中から伝はつて来る耕作の鍬の音を一方の裏庭の方に聞きながら、桃や梨の樹の間を歩いて新しい果実の香気を嗅ぎ廻つた。あたかも成熟した樹木の生命を胸一ばいに自分の身に受納れようとするかのやうに。

オート・ギエンヌの秋は何となく柔かな新しい心を岸本に起させた。彼は長い年月の間ほとんど失ひかけて居た生活の興味をすら回復した。仮令罪過は依然として彼の内部に生きて居るやうなものでもあつても、彼はいくらか柔かな心でもつて、それに対ふことが出来るやうに成つた。」(註65)

(以下次号)

## 註

- 1) 「藤村全集第七巻」 筑摩書房版、昭和53年、P. 4 (以下「新生」に関する引用はすべてこの書をテキストとし、ページを記すのみにとどめる。)
- 2) P. 7
- 3) P. 10～11
- 4) P. 13
- 5) P. 4
- 6) P. 6
- 7) P. 6
- 8) P. 12
- 9) P. 446
- 10) 中村星湖 明治17年生まれ。後期自然主義の中堅的存在の作家。
- 11) 「藤村全集別巻 上」 筑摩書房版、昭和53年、P. 231～235
- 12) 同 上 P. 236～244
- 13) 初出 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編纂「毎日年鑑——大正九年版——」1919 (大正八)年12月5日発行。  
「芥川龍之介全集第三巻」 岩波書店、1977年発行、P. 282
- 14) 同上全集 第九巻、P. 334
- 15) P. 40
- 16) P. 34
- 17) P. 31～32
- 18) P. 32
- 19) P. 33
- 20) P. 34
- 21) P. 43
- 22) P. 45
- 23) P. 46
- 24) 同 上
- 25) P. 57

- 26) P. 55
- 27) P. 34
- 28) P. 61
- 29) P. 61
- 30) P. 65
- 31) P. 66
- 32) P. 68
- 33) P. 66
- 34) P. 79
- 35) P. 69
- 36) P. 90
- 37) P. 97
- 38) P. 98
- 39) P. 98
- 40) P. 99
- 41) P. 101
- 42) P. 109
- 43) P. 116
- 44) P. 117
- 45) P. 118
- 46) P. 145

- 47) P. 128 ~ 129
- 48) P. 129
- 49) P. 162
- 50) P. 173
- 51) P. 174
- 52) 「藤村全集第五巻」 筑摩書房版 昭和53年、P  
612 ~ 622 に所収。「桜の実」の読者に」の稿も  
同書のP. 597 ~ 598 所収されている。
- 53) 同 書 P. 598
- 54) 同 書 P. 612
- 55) 同 書 P. 427
- 56) P. 65
- 57) 「藤村全集第五巻」 P. 489
- 58) 同 書 P. 486 ~ 487
- 59) 同 書 P. 454
- 60) 同 書 P. 480
- 61) 同 書 P. 481
- 62) P. 149
- 63) P. 170
- 64) P. 187
- 65) P. 187 ~ 188